
真実の王に仕えるは、至上の喜び

麻戸 槩來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真実の王に仕えるは、至上の喜び

【Nコード】

N0478W

【作者名】

麻戸 槩來

【あらすじ】

大して期待されていない第二王子であり妾の子。面倒な事はきらいだから、母さんと平凡に暮らしていければいいと思っていたが、最近は少し変わった楽しみが出来た。神と呼ばれる狼と娘が面白くてしょうがないのだ。以前の『神と呼ばれた獣の嘆き』の世界を違う立場から描いてますが、単品としても楽しめるようになっていきます。基本、狼と娘メインになる予定。 本編は一応完結しています。

前編（前書き）

前作では出てこなかった名前と愛称を、今回は考えました！

神（おおかみ）……エイネム

生け贄の娘（少女）……シエールor姫

レエンダ 国の第二王子……ジエードorジエド

前編

『我、主らの言霊を必要とし
言霊を発するには、まだ足りぬ
伝授者として、選びたるはお前なり』

絶対的な威圧感に、震えが走る。
念話という手段は何度かとられているが、何時もは一言二言でこ
んな長いのは
初めてだった。戸惑いよりもそこから感じる彼の力の強さが、ただ
ただ恐ろしい。

俺は、どうしてこんな事になっているんだ。
そう思いながら、意識を手放した。

?
?
?
?
?
?
?

俺の前ではとても貴重であり、異様な光景が展開されている。

それこそ異国で聞いたことのある、象ほどの大きさをしている白銀の狼と、少し

珍しい銀の髪色を持った娘が仲よさげに戯れているのだ。

何より異常なのは、本来喋ることのないはずの狼が元生け贄の少女と楽しそうに

会話していることだろう。

「シエール、何か欲しいものは？」

「うーん、エイネム用の櫛とそろそろ新しい本がほしいかな…」

「そうか、ではジエドに持って来させよう」

…なぜか、本人の了承なしに、俺は姫の要望を叶えることになったらしい。

まあ意見を求められないのは、今に始まった事ではないかと、思いながらも、

ジエールはため息をついた。

「…分かりましたよ。姫様のため、果てはエイネム様のために喜んで持ってきます」

「とも」

「王弟殿下…。その、姫というのはやめていただけませんか？」

敬語は癖だからしょうがないとしても、せめて名を呼んで下さい」

「いや、シエール姫を呼び捨てては、エイネム様に怒られますので」

大体、『お姫様のように大切になさっているのですね？』という、
エイネム様に

対する、いやみも込めているのだから、姫には我慢していただき
たい。

まあ、本人にその真意は伝わっていないようだが。

大体、王弟といえども、神と崇められている存在に大切にされてい
るのだから

そんな思考が働かなくても、俺よりも遥かに姫のほづが上になるの
に。姫は驕るおこ

こともなく、普通の考え方をしているようだ。

此処に突然連れてこられた仲間としては、頭が下がる思いだ。

そもそも、俺がここに連れてこられた時もこちらの事情はお構いな
しだった。

生け贄の娘を差し出してからは一週間に一度、神へ食料や日用品を
渡すのが

習慣化された。てつきり、生贄は即座に殺されるものと考えていた
が、予想に

反し神は娘と生活を共にしているらしい。

念話と言うのは、だいぶ力のある生物しかできない芸当だ。

それが出来る存在は神獣とよばれ、崇められている。中でも神と呼ばれている

エイネム様は他とは計り知れない力を持ち合わせ、人間を守ってくださっている。

しかし、エイネム様の力はあまりに強いがゆえに、念話を交わすことに慣れていない

神官たちでも辛いものがあるらしい。それ故、神と念話を交わすまでもでいられる

人間は、王族以外では極わずかだ。大抵の人間は神獣と念話を交わすだけで、その

偉大な力を前に意識を失い、酷いときは狂うものさえ出てくる。

そのため神の意志を聞き、人々に伝える名誉ある仕事をする人間は、王族や神官長

から選ばれる事がほとんどだ。本来、一般人の中からその貴重な人間を見つけ出せ

ればいいのだが、身分の高いものすら神獣とかかわる機会がないのだから、確かめ

ようがない。

そこで、第二王子という邪魔な存在で、大して重要なポストについてない俺のような

人間が選ばれたのだ。今まで神官長がしていた役目なのだから、これからも神官長

にまかせると言う声を押し切り、義兄である王は就任後にその貴重な役目を俺に

押し付けた。

俺は昔から術を扱うのがうまかった。

そこいらの魔術師よりもうまく、手に負えない事件や、事態に陥るとすぐ駆り出さ

れた。義理の母や義兄にとって、目の上のたんこぶでしかない俺は、そこで死ねば

いいと考えられていたのだろう。どうせ、妾の子でしかない俺には、父親である

はずの王ですら、あまり期待はしていなかった。

そもそも、俺の母親は下流貴族で、城に花嫁修業として働きに来ていたのだ。

にもかかわらず、当時義兄を身ごもっていた義母に手を出せないという、下らない

理由で王に無理やり関係を迫られ、俺を身ごもった。

それが分かったのは、奇しくも幼馴染と結婚しようと思っていた日だった

らしい。けれど、結婚が決まっていたとしても、王の子を身ごもった女を国は放し

はしなかった。母は無理やり、望まれもせずに側室として迎え入れられた。幼馴染と

の婚約が決まり、これから幸せになろうという女に、よく王はそんな事が出来たもの

だと、死んだ今ですら憎しみがこみ上げる。

唯一のの救いと言えば、不愉快な父親ではあるが見る目はあったよ

うで、母は

人間が出来ていた。

望んでできたわけではないはずなのに、母は俺にひたすら優しいのだ。大した後ろ

盾がないにもかかわらず、難しい人間関係をうまく築き、身分が高く後ろ盾がある

義母よりも周囲に人気があった。

その上、魔術がからつきしダメな義兄とくれば、俺を王にと推す声
が上がるのも頷け

る。まあ俺や母はそんなものを望んでなく、ただ穏やかに暮らせれ
ばいいと考えて

いたので、わざわざ義兄たちを敵に回そうとなど考えもしなかった。
国など、適当に運営していてくれればいいし、むしろ何故そんなに
上に立ちたがるの

か不思議でしうがなかった。そんな俺たちの考えは、権力や金に
目がくらんだ人間

には理解出来なかったようで、事あるごとに俺を危険な仕事に向か
わせた。

あの日も、生け贄など、悪趣味なことをすると考えながら、何時も
のように俺は神殿
に食料を運んでいた。

不思議なことに、神は生け贄を渡してから、今まで要求していなか

った事を望むよ
うになつていた。これまで神が望んでいたものは金品や宝石の類だ
つたのに、最近
ではもっぱら食料を用意するように言われていた。それもどれも高
いものではなく、
一般的な市民が好みそうなものばかりで、始めのうちは俺が勝手な
ことを言っている
のではないかと、疑われるほどだった。

誰が、神の名をかたるような事をするものか。
そんな事をしようものなら、確実に面倒なことに巻き込まれるに決
まっている。

取りとめもない事を考えていると、何時ものように突然神の声が聞
こえてきた。

『人間よ…』

お前の言霊は、うまいか？』

はあ？

や、やば。神と念話を交わしているときは、考えている事が全て伝
わってしまう
のに、つい今までにない質問だったため、思わず本音が浮かんでし
まった。

漸く神の唐突さに慣れてきたと思っていたのに、これではあの魔物
の巣窟のような
王宮では暮らしていけない。

…けれど、言霊がうまいとはどんな感覚なのだろうか。
この世界では、言葉を発することでその言葉は力を宿すとされているので、その効力を言霊と呼んでいるのは分かる。…もしかして、神はその偉大すぎる力ゆえに、言葉イコール言霊と解釈しているのだろうか？まあ、神ほどの力が放つ言葉には、相当なる力が宿りそうだから、それも頷けるが、このお方は何と言う表現をなさっているんだ…。

『お前が発する、言霊は誰にでも伝わるのかと、聞いている』

えっと、それは訛りなまなどもなく流暢であるのかということでもいいの
であろうか？

「はい、この大陸で言葉は一貫しておりますので、よっぽどの訛り
がない限り

伝わるかと思えます。」

考えればいいだけなのだが、あまりに動揺したため口に出して答え
てしまった。

…にしても、神は何が伝えたいのだろうか？さすがに、六度目とは
いえ長く話して
いると体がきつい。

目がかすんできた。これでは、意識が沈むのも時間の問題だろう。

『…しばらく、我に付き合ってもらおうぞ』

意識が沈むとともに、そんな言葉が聞こえた気がした。

後編

目が覚めると、どこかの床に寝かされていた。

まだ頭に痛みが残っているが、動けないほどではないだろう。手や足へ試しに力を

入れて確かめる。よし、ゆっくりならいけそうだ。

体を起こすと、神が目の前にいて思わず肝を冷やした。

すぐさま、御前で無様な姿をさらしてしまったことを謝ろうとするが、予想外に

神から伝わってきたのは怒りではなく謝罪の感情だった。

『…すまぬ』

それは、勝手にあなたの城へ連れてきた事を謝っているのか、私が倒れたことへの

謝罪か分かりかねます。

突然の移動と、心労のせいで大いぶ不躰ぶしつぽな態度をとってしまったが、神はたいして気にした様子はなかった。

『…どちらもだ』

本当に申し訳ないと思っているのか、神は念話の量を減らそうと、ぶつ切りの念

しか送って来なくなった。それはそれで分かりにくいのだが…。

神の話を要約すると、どうやら奇妙なことに生け贄としておくれた娘と会話を

したいらしいのだ。『それは…なんともまあ、酔狂なことで』そう考えた途端、神

にいらまれたので俺は考えを停止させる。

しかし、念話を使うことで苦しめたくないなどと、ずいぶん入れ込んでいる事が

分かる。これは、断るわけにはいかないだろう。

それから、神がうまく発音し、表現の仕方を間違えなくなるまで特訓は続いた。

俺からしたら、そこまでこだわる事はないではないかという部分まで厳しく追及

するので、神が言葉を習得するまでに俺は何度も精神的に疲労し、ぶっ倒れる事にな

った。俺が考えている以上に、神ことエイネム様は彼女を大切にしていると思う

で、神が彼女と普通に話すようになって、シエールと会わせてもえなかった。

…別に、俺は貴方からシエール姫を取ろうとなんて思っちゃいませんので、

ちよつと呼び捨てにしたくらいでいちいち睨まないでください。後、勝手に人の

思考を読むと、姫に嫌われますよ。

全く、神の正体を知ってみれば、一人の娘を溺愛しているだなんて、遠い国の

「幽霊の正体見たり、枯尾花」という言葉が頭に浮かんでしょうがない。少し

過去を思い出していた時に呼び捨てにしたからと言って、いちいち睨まれていたのでは心臓が持たない。

そもそも、エイネム様の言葉によると、神だ何だと言いだしたのも我々だというのが、だからやっつけられない。

我々は、我々が作り出した絶対的な存在に、怯えていたのだ。

姫が「エイネム様に言葉を教えた人に会ってみたい」と言って下さらなければ、

こんな場面を目の当たりにすることはなかったであろう。

今では、一緒にお茶を飲みながら神の、「飼い主に構われてデレデレしている

犬」の様な姿を見られるのだから、不思議なものだ。

『 じるさい

今度来るときは、櫛と本を忘れるな』

『はいはい、分かりましたよ』

おっと、さすがに、ここまで言われると無視はできないのか。

いや、それとも自覚しているのか？と、勝手なことを考え俺は心の中で、ひっそり笑った。

?
?
?
?
?
?
?

神の元を離れ自身の城に戻ってくると、何時ものように義兄たちに呼び出された。

あわよくば、俺が神の念に耐えきれず精神を病めばいいと考えていただろうに、

あの人たちにとったらとんだ期待外れだったのだろう。

言い気味だとは思うが、こんな風に絡まれてはたまったものではない。俺を殺し

たくてしようがないだろうに、神のお気に入りとあつては碌に害する事も出来ない

のだ。苛立つのは分かるが、こんな幼稚なやつあたりはやめていたきたい。

わざわざ疲れている所を呼び出されるこっちの身にもなれというのだ。近頃は慣れ

てきたとはいえ、念話をエイネム様と交わすとどうしても疲れがたまる。

とはいえ、そんな思いをしてもいいと思える程、あの方たちを観察しているのは

面白い。

この役目を受けたことで、王といえども大々的に俺を処分するのは難しくなった。

何せ、神の声を聞いているのだ。信者たちからすれば、憧れであり重要な位置にいる

ことは想像に難くない。ヘタに神にかかわる者を罰する様なことがあれば、神から

直接裁きを下される危険もある。たとえば、義兄が信仰心が薄くとも、信者たちは

黙ってはいないだろう。

そんな事を考えているうちにも「念の為に」と呼びだされた神官長が、若干青ざ

めて震えているのが横目に映る。

どうやら、神が人間と接触を図ったのは俺が初めてらしい。どういう事が始めは

分からなかったのだが、神の様子を眺めていて理解した。エイネム様はとても金品

ましてや宝石を欲しがる方ではない。あの方の城にもそんなものは見受けられな

かった。毎月のように貢物を用意していたのだ。全く目にはいらな

いなどあるわけがないだろう。

とすると、今までの貢物はどこに消えたのか？

考えるまでもない。神官長がくすねていたに決まっている。

どおりで神殿などが綺麗になっているはずだ。毎年、どこかしらの神殿を回想して

いるのだから、怪しいとは思っていたが、たとえ神のためとはいえ、神の名を勝手に語っていいことにはならないだろう。シエール姫が現れるまで、面倒で人間に近寄ってすらいないとエイネム様がいうのだから、そちらが正しいのだろう。我らが神は、姫以外の人間にあまり関心を寄せていないことが、これまでで嫌というほど分かった。

以前、それについて何か神官長を罰そうかとエイネム様に申し出たことがある。しかし『お前の判断に任せると』言って下さったので、彼らをどう調理するかは俺次第という事だった。思わず神官長を見てにやりと笑ってしまう。ビクッ

その瞬間に、面白いほどに神官長は体を震えさせた。

「おい、何を笑っておる」

まったく…そんなに怯えるくらいなら、神の名をかたるなど恐れ多い事をしなければよいのに、愚かなことだ。先代の王の時代には、貢物を用意する風習があったのだから、さぞいい蜜を吸っていたことだろう。この男、叩けば叩くだけ埃が出そうだ。

「答えぬか！全くあの売女といい、お前といい役に立たぬ奴らめ
父上は素晴らしい方だったが、あんな身分の低い女に手を出した
のだけは最大の
過ちだ」

……ほお？

この男は碌に事情も知らずに、よく恥ずかしくないものだ。
俺など、あの色欲に溺れた男の息子だと言うだけでも死にたくて堪
らないという
のに、密偵にまんまと殺された男を賢王と信じて疑っていないのだ。
自身で体験
していながら、優秀だったのは周りで支える者たちだと言うのが何
故分らない？

この国の未来を本気で案じ、働いてくれる者たちがどれだけ力を尽
くしてくれている
事か……。拳句の果てに、母を売女だと？
嗚呼、神が言った言葉が頭をよぎってしょうがない。

『 お前が国を率いた方がうまくいくのではないか？
もしその気になれば、多少なら力を貸してやるぞ』

そうなったら、せいぜいシエールのために働けよ。と付け足された
のは気になる
が、俺がその気になれば、神の後ろ盾を貰えるという事だろう。そ
れほど力強い

事はない。面倒だし興味もなかったが、少し挑戦してみるのも面白

いか…。

俺はいまだに喋り続けている無能な義兄へ、にこやかに笑いかけた。

「すみませんが、少し用事を思い出してしまいましたので、失礼ながらここで休暇

させていただきます」

後ろで義母と義兄がわめき散らしていたが、知ったことではない。

さあ、これから忙しくなるぞ。

俺が王になるためには有能な協力者が必要不可欠だし、母さんにも協力を仰がなければ。

だがその前に、きっかけをくれたエイネム様と姫のために上等な櫛と本を用意

しようと思え、俺は忙しく走り出した。

後編（後書き）

後日談などが浮かび次第、またエインム視点やシエール視点を投稿できればいいなーと考えています。連載作品だと、完結にしているから続きを投稿してしまう事が多かったため、今回は様子を見えます。

此処までお付き合いいただき、ありがとうございました。

継承式の心得（前書き）

裏タイトルをつけるのなら、ジエド王子は苦勞症。

お気に入りにして下さった方、評価を下さった方が結構いてドキドキしています。

ありがとうございます。

継承式の心得

「神よ…」

この度、貴方様の御世話をさせていただいていた私がレエンダ国の第二王子

ジェードが、正式に新国王と相成りました。つきましては我が国の繁栄が

末永く…」

「何だ、その堅苦しい高言は」

さつきから大分イラついてはいたが「お前には似合わぬなと」言われた言葉に、
とうとう切れた。

「…だから！神に守護されている国と他国に知らしめるために、大々的に式を開くから、協力してくれって言ってるだろう！！で、今はミスのないように練習してんだよ」

あんたの為にな！と、怒鳴り散らしたいのを何とか耐えて、姫に視線を向ける。

収賄やらなんやらで真っ黒だった義兄を玉座から引きづりおろし、
何とかここまで
こぎ着けたのだ。まさか、一番の頼りの綱である神に邪魔させるわ
けにはいかない。

姫はというと、珍しく大声をあげてどなり散らしている俺に驚いて
いる。

俺が「協力してほしいと」言って一人、少し離れた場所で暇をつぶ
してもらっていた
のだ。本を読んでいるときは、滅多な事がない限り周りに気を配つ
たりしないのだが、
今回ばかりは驚いてエイネム様に抱きついていた。

それを受けて、大きな狼が嬉しそうに尻尾を振っているのがまた気
に障る。

俺は慣れない事務作業やらで、苛立っているというのに、その元凶
が幸せでたまらない
といった様子なのが、本当に解せない。こちとら、信者や他国から
やれ「神を利用した

のか」「まさか特別な取引（言ってしまうえば買収）でもしたのでは
ないだろうな」など
と言われないように必死になっているというのに、何をデレデレし
てやがる。

ちなみに一番の脅威である神官長は、以前『神の名を勝手に語り金
品の類を要求して
いた件』から俺の監視下にあるため、余分なことは言えないだろう
し、言わせない。

元より、これは我が国の為であるというのは否定できないが、俺が

全面的に神に信頼

されていると証明するためでもあるのだ。それが出来れば、何かと変わってるこの神の

本性を晒さずに、俺が独断で様々な世話を焼く事が出来る。

これまでは、力量の差が顕著であるがゆえに大きく他国と揉めるようなことはなかった

が、周辺諸国もほとんど力をつけてきているため、今の状況に胡坐をかいているわけ

にはいかない。

俺を国王にと推してくれた者たちの中には、愚かな父親や義兄に愛想を尽かした者の

ほかに、ぬるま湯のような現状の打開を望む者も多かった。それが出来なければ、俺は

王として失格であろうし、そもそもあの馬鹿を押しつけて王になった意味がなくなってしまう…。

「なんだかジエド様、何時もより苛々なさっているのね」

「嗚呼、気にすることはない。今まで面倒の一言で片づけて逃げた事と向き合っ

て戸惑いと不安を隠せていないだけだよ」

最初、俺に『言葉を教えると』言ってきたときとは比べようもない程、甘く柔らかに

エイネム様が姫に話しかける。

……おい。

確かに、柄にもなく緊張しているのは認めるが、己の行いは棚上げか？

「練習に付き合えと」言えば、目に見えて嫌そうな顔をし。 姫が気をつかい離れてくれ

たと思えば、顔をそちらに向けた状態で聞きやあしない。

シエル姫に、持ってきたばかりの上等な櫛を先に渡したのが悪かったのか……。だが、

それは同時に渡した本で「暇をつぶして居て下さいと」いう無言の訴えだったのだが、

俺のやり方が悪かったのか？まさかそんなに直ぐに、エイネム様が床に寝転がり毛を

梳いてもらおうとするとは思わないじゃないか。

何もそんなに物欲しそうな顔をしてシエル姫を見つめないでもないじゃないか。

っていうか、さっそく続きをしようとするんじゃない！！

結果、俺がエイネム様の城に居られるぎりぎりまで、式の練習をすることはかなわなかった。

継承式の心得（後書き）

結局、ジエドが王になっても何になっても、エイネム様にはかなわないので真実の王はエイネム様だと思います。

ただし、話し方はだいぶ砕けましたね。

私個人としては、シエールとエイネム様が幸せだったら嬉しいのですが、皆さん実はジエドが好きですか…？

もしご意見聞かせてくれたらうれしいです。

ジエドは、あまり表だったキャラではなかったので、お気に入りが増えてびっくりしてます。

番外編？ 神の誤算（前書き）

もうひとつタイトルをつけたら、今日は何の日？です。

ただこの日に合わせたくて突発的に書いたので、本当におフザケです。今回は幼馴染は出てきません。

エイネム様が可哀想？です。シエールはセクハラを許しません。

番外編？ 神の誤算

「エイネム、それは何ですか？」

「おお！シエールよくぞ聞いてくれた。
これは異国で有名な菓子だそうだ」

「そうなのですか。何やらチョコレートがかかっていて美味しそうですけれど、

不思議な形なのですね」

「一本食べてみるか？以前に食べてみたが、なかなか美味かったぞ」

エイネムはシエールに勧めてみた。そもそも彼女に食べて欲しくて持ってきたせ
たのだから、どんどん食べて欲しい。

「今日はこの菓子が出来た日らしいぞ」

「そうなのですか！美味しくて、つい手が伸びてしまいますね」

彼女にも受け入れてもらえたようで、何よりだ。

ポキポキといい音をさせながら食べる様は、まるでリスなどの小動物を思い

出させて、大変可愛らしい。
しかし、本来の目的はまだ果たされていない。今日であるからこそ、
普段では
頼めないことも言えるのだ。

「シエール、このお菓子にはちょっと面白いゲームがあつてな。ま
ず一人がこの

端を口でくわえて、もう片方を相手が食べていくんだ。それで、
先に放した

ほうが負け……」

「えっ？何それキモい」

「……えっ？」

初めてシエールに一刀両断された……。しかもキモいって。あの優し
いシエールが
キモいって。。。
一気に力が抜け、その場にへたり込んだ。

「下心満載に、セクハラしようとするから悪いのですよ。
おまけに今日は鏡の日でもあるらしいですよ。といつことば、はい
姫」

「うわぁ、可愛い手鏡ですね」

裏には薔薇が描かれており、手元は葦が絡んだようなデザインになつていて素敵らしい。赤を基調とした石が散りばめられたそれは、シエールは氣付いていないようだが実は宝石だ。

きっとそれを教えさえすれば、ジェドからの贈り物など受け取らずに済むだろうが……。これだけ喜んでいのに、遠慮で笑顔を曇らせないで欲しい。

大体、あれはジェドのポケットマネーから出しているから気にする必要はないのだ。流石に一国王だけあって、あれくらいはなんて事ないであろう。

泣く泣く邪魔するのを諦めた。どうして私はき……。
：などと言われて、ジェドだけあんな満点の笑顔を向けられているのだ。

納得がいかない。一度でいいから、有名なあのゲームをシエールとしてみたかった。

とりあえず、むかついたので先程からニヤついているジェドには、浴びるほどのチョコレートを頭からかけておいた。

番外編？ 神の誤算（後書き）

他の日は忘れていている事が多いのに、この日ばかりは見た目のイメージから思い出す人も多いのではないのでしょうか？有名なお菓子の日でした。

おまけに、今日は宝石の日でもあるらしいです。ちょっと調べているうちに楽しくなっているいろ付け足してしまいました。

なんと！ポイントまでこの日を祝ってくれているようで、ぞろ目でした。いつもお世話になっている皆様、ありがとうございます。

手紙に込められた思い（前書き）

場所だけ移動しました。

手紙に込められた思い

「エイネム様、エイネム様」

「どうしたシエール？」

嗚呼、それから様はいらないと言っているだろう。エイネムと呼んでおくれ」

「…わかりましたわ」

「……おい、そこで頬染めてるバカップル。

さんざん二人っきりの時間はあるだろう。せめて、他人が居るときくらい

人に気を遣いやがれ」

「…なんだ、ジエド居たのか」

「あんたが連れて来たんだよ！」

人がせつかく物資やら必要な物を持って来てやったというのに、なんだその

態度は。

あと姫、貴女も俺の存在に気づいて驚いていますか？でっかい目をまん丸とさせ

ているから俺に気付いてなかったのがたやすく分かりますね。

素直で何よりですが、いくらエイネム様が普通の狼と比べれば規格

外に大きいと

いっても、あれだけ近くにいたら、気付いてくれてもいいでしょう！

「まあ、ジエド…えーつと陛下？

何時も私たちのために、ありがとうございます」

えーつとは要りません。きちんと式はあげましたので、正式に国の責任者です。

大体、何故疑問形なんですか。貴女もエイネム様と一緒に式に参加していたでしよう。

エイネム様より直々に申し込まれ、シエール姫は王位継承式で正式に巫女姫と
なったことを報告した。生け贄の娘とされていたのが、巫女姫として公表された
のだからこれからは神殿のほうでも丁重に扱われることだろう。

全く、神ではないといいながら姫に関することだけはエイネム様はぬかりない。

偉大な力も、実際は自然界とシエール様のためにしか使っていないと知ったら、
信者たちはさぞや騒ぎ立てる事だろう。

巫女姫とは主に神の傍に常に待機しており、そのお心に少しでも沿うようにする
のが務めだ。

というのは、最近考えたシナリオだが。

エイネム様の望みを終結したら、このような表現がふさわしいと俺が考え

ただ。

「嗚呼、忘れるところだった。」

今日は姫に手紙を預かって来たんですよ。ランツェっていう若い娘、知って

いますか？」

それを聞いた途端、姫は瞳を潤ませ手紙を抱きしめた。

驚いた俺は、突然の行動に受け身をとる時間がなかった。

「いったい！」

何するんですか、エイネム様。あんた自分の力を考慮して下さいよ

「うるさい。シエールを泣かすお前が悪い」

んにゃろっ…。

よりもよって、この御方は俺の体をその太い腕でふっ飛ばしやがったのだ。

確かに猫がじゃれる様な動きだったが、この大きさをもってすれば、立派な

凶器だ。

しかも『あんた、俺のせいじゃないって分かかって八つ当たりしただろ！！』

そう心の中で問いかけると、簡単に『…まあな』と返してきやがっ

た。

嗚呼、こういう性格だと分かってはいたが、一度と言わず何発か殴ってやらな

ければ気が済まないのだが、許させれるだろうか？

久しぶりの念話がこんな形だなんて、なんの陰謀だ。

「ごめんなさい、つい懐かしくて泣いてしまったわ。

もう大丈夫だから…心配しないで」

怒鳴るか、殴るか迷っているうちに、姫は自分で立ち直ったようだ。今は、少しはにかみながらエイネム様の首元に抱きついていてる。

その様子に安心したのか、エイネム様の機嫌も少し治ったようだ。釈然としない

思いを抱える事になったが、後に俺はこの手紙により激しく楽しませてもらう事となった。

？

？

？

？

？

？

？

？

ジエド様から受け取った手紙は、幼馴染が書いたものだった。

内容は、私が生け贄となるのを止められなかったのを謝罪する物だったり、辛い

思いをしてないか、体調を崩してないかとこちらを気遣う物ばかりだった。

その為、彼女の様子をつかがい知ることが出来なかったが、心には温かい物が

ぐっとこみあげる。きっとここで泣いてしまえば、心配性のエイネム様に迷惑を

かけてしまうから泣かないけれど。

彼は、生け贄と言う形で私をここに連れてきた事を、未だに後悔しているよう

なのだ。私がここに来てだいぶ経つし、偏見の目で見られる事もなく私は幸せだ

というのに……。どうも、彼はどこか不器用な所があり放っておけない気持ちにさせる。

最初は、ただの食料として生け贄に選ばれたのだと思っていたから、それから

考えると今の状況は信じられないほど恵まれているし、満たされている。

ただ、我が儘を言うとしたらランツェに会って、私は幸せなのだと伝えたい。

疑り深い彼女のことだから、手紙だけだと私が無理していると取ら

れてしまう

心配がある。だから私の幸せな様子を、無理をしてない笑顔を見せて彼女を安心させてあげたかった。

手紙には直接綴ってはいなかったけれど、私に『会いたい』という気もちが

込められていた。

身内を亡くした今となっては、故郷で私を心配してくれているのは差別をせずに接してくれた彼女だけなのだ。

何時か会えればいいと思う。

そして、私は胸を張って言いたい。私は心から笑える場所を見つけたよと。

神の天敵（前書き）

私にとっての近いうちは、一カ月後っていう皮肉…。

待っていて下さった皆様！本当に申し訳ないです。

ちょっと短いですが…今度こそ、本当に幼馴染が登場します。

神の天敵

いつものように食料などの日用品を、ジエドの元に取りに行くとき、何故か

細く貧相な娘がいた。此処は仮にも神聖な場所とされている為、一般の人間は入れないはずなのだが…。

「何だこの貧相な娘は」

「失つ礼な奴ね！

あんたなんて神だとか呼ばれていても、ただの犬っころのくせにとつととシエールを返しなさいよ」

41

あまりの喧し^{やかま}さについて苛つき、珍しく困った様子のジエドを尻尾で殴ってみた。

蛙の潰れたような声が聞こえた気がするが、きつと気のせいであろう。

「とりあえず、詳しい事はシエールと共に聞かせてもらおうか」

その言葉を最後に、私は目の前の小娘とジエドを連れて城に戻った。

?
?
?
?
?
?
?
?

いつも通り、日用品とジエド様を迎えに行つたはずのエイネム様が、
とても

不機嫌そうに帰ってきた。尻尾は苛々と不機嫌そうに振られ、眉間
にはしわが
寄っている。

「ど、どうかしたのですか…?」

「……いや、大したことではないのだが」

珍しく、言い淀むエイネム様に首をかしげる。自惚れているつもり
はないのだけ
れど、エイネム様は私が怯えないように些細な反応でさえ気を配っ
てくれている。

だから、こんな風に苛立ちをそのまま表現しているのは珍しい。本
当にどうした

というのだろうか?彼が誤魔化すのを難しく感じるほど、何か悪い

事でも起こったのだろうか…。

現在は目立った戦争などは起きていないが、以前ほど我がレエンダ国の権威は

なくなってきた。その為、周囲の国々に対する牽制も込めて、神と呼ばれる

エイネム様とジエド様は親しいのだと見せつけていると言っていたのに…。

まあ、わざわざそんな事をしなくも、彼らの仲はいいのだが。

しかし、もしもエイネム様が頭を悩ませるほどの事件が起きていたとしていたら

問題だ。基本的に、エイネム様は人間同士の争いに口出しするのを良しとしない。

ジエド様だって、エイネム様に人間同士のいさかいに手を貸してもらおうとは

考えていないだろう。

いくらエイネム様が否定なさっても、人間たちにとって奇術を扱う彼は神以外の

何物でもないのだ。そんな彼の頭を悩ませる事など、不可解な行動をとる人間と

自然くらいしかない。ジエド様もエイネム様も、怪我をするようなことがなければ

いいのだが。

「シエール！」

私の暗い思考は、明るい少女の声によつてかき消された。
少し体を動かしたエイネム様の後ろから、最近では見慣れたジエド様と、
懐かしい人物が姿を現した。そこにいたのは唯一の友人であり、以前に手紙を
くれたランツェだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0478w/>

真実の王に仕えるは、至上の喜び

2011年12月8日02時52分発行